

人生 90 年時代、「Aging in Place」を目指して 高齢者がフレキシブルに働くことのできる就労モデルを構築する

「セカンドライフの就労モデル開発研究」は、東京大学 高齢社会総合研究機構 特任教授の辻 哲夫先生を代表者とする研究開発プロジェクトです。

辻先生が所属する東京大学高齢社会総合研究機構は、千葉県柏市・UR 都市再生機構と協働で、高齢化が急速に進展している柏市豊四季台団地を中心に、長寿社会のまちづくりモデルの構築を社会実験として進めています。辻先生はこの取り組みの一翼として、「高齢者の就労」をテーマに RISTEX「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」研究開発領域でプロジェクトを展開しています。

世界のどの国も体験したことのない超高齢社会に挑戦する取り組みに、海外のメディアも高い関心を持っています。2012 年 6 月、外国プレス取材活動を支援する公益財団法人フォーリン・プレスセンターと東京大学が共同で開催した柏市でのプレスツアーの様子を報告します。



★高齢者が安心して生活し続けることのできるまちづくり

「Aging in Place」とは、『住み慣れた街で年を重ねる』ということです。

ツアー開始前に、フォーリン・プレスセンターで行われた秋山弘子領域総括（東京大学 高齢社会総合研究機構 特任教授）の概要説明「長寿社会のまちづくり」には、外国プレス関係者のほか、欧米、アジアを中心とする大使館関係者など約 30 名が熱心に耳を傾けました。

「2030 年には日本の人口の 3 分の 1 が 65 歳以上の超高齢社会となり、80 歳、90 歳での一人暮らしがごく普通になります。現在のインフラをハード・ソフトともに高齢化に対応するように作り変えていくことが今後の課題です。これからは①自立して過ごす期間（健康寿命）を延ばすこと、②虚弱になっても住み慣れた町で安心して生活し続けることができる環境づくり、③人間関係の希薄になったコミュニティを変え、人の繋がりをつくること、が大切です」。

2012 年以降、「団塊の世代」が 65 歳を迎えます。「この世代は家庭を省みない企業戦士で、長い間早朝から夜遅くまで東京で働いていたのに、定年退職でいきなり地域にずっといるようになって居場所がありません。元気だし知識やス



東京・内幸町のフォーリン・プレスセンターでプロジェクトの概要を説明する秋山弘子・「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」領域総括

キルも豊富なのに、何をしたいかわからず、人生を持て余してしまいます。地域活動やボランティア、生涯学習のプログラムはありますが、自ら参加する人はあまりいません。彼らが自然に外に出やすいのは『仕事』なんです」。

現在の日本には定年退職後の就労の場はほとんどありません。「遠くまで通勤するのではなく、家から歩いて行けるところに就労の場があり、高齢者自身が趣味やライフスタイルと組み合わせる働き方をフレキシブルに自分で決められるのが理想です。ワークシェアリングの導入がカギです」。

★社会実験の舞台・千葉県柏市

東京大学が超高齢社会のモデルとしてまちづくりに取り組んでいるのは千葉県柏市。都心から電車で 30～40 分、人口 40 万人の典型的なベッドタウンです。



築 50 年近く経ち、老朽化した豊四季台団地。典型的な高度成長期の団地の建築スタイルで、エレベーターなしの 5 階建て

JR 柏駅からバスで 10 分ほどの豊四季台団地は、1964 年に入居が始まった約 4700 戸の大規模団地で、築 50 年近く、建物の老朽化とともに住民の高齢化も進み、2010 年現在の高齢化率は 40%に達しています。

秋山総括と辻先生の所属する東京大学 高齢社会研究機構（以下、IOG）は、この団地の建て替えを機に、所有者である UR 都市再生機構、自治体である千葉県柏市と協働で、ハード・ソフト両面で超高齢社会に適したモデル都市づくりを 2009 年からスタートしています。

2012 年 2 月には野田総理大臣がこの取り組みの一環である「豊四季台団地における地域包括ケアシステム」について視察を行いました。

★高齢者の生きがいとなる働き方を創造する

辻先生のプロジェクト「セカンドライフの就労モデル開発研究」は、IOGの「超高齢社会に適したモデル都市づくり」の研究の一環として、定年退職した高齢者が、生きがい、やりがいを得て地域で長く活躍できる、現役時代とは異なる働き方の創造を目指して活動しています。

プロジェクトの目指す「生きがい就労」は、⑦自分の都合や体調に合わせ、働きたいときに無理なく楽しく働ける、①現役時代に培ってきた能力・経験が活かせる、②高齢者が働くことでその地域の抱える課題を解決するのに役立つ、ことをコンセプトとしています。

具体的には農業関係事業として①都市型農業、②ミニ野菜工場、③屋上農園、食関係事業として④コミュニティ食堂の運営、⑤移動販売・配食サービス、多世代への支援事業として⑥保育・子育て支援、⑦生活支援・生活充実、⑧福祉サービスの8つの事業を立ち上げ、民間事業者との協働のもと、高齢者の生きがい就労のあり方を開発しています。

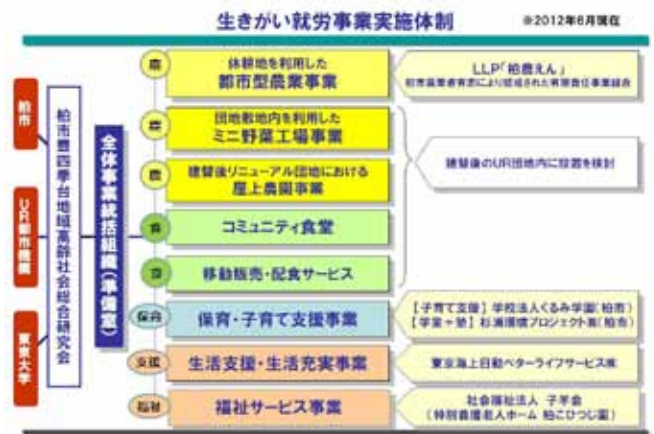
★特別養護老人ホームで36名がワークシェアリングしながら就労

最初に訪れたのは、既に建て替えが終了した新しい団地に開設された特別養護老人ホーム「こひつじ園」です。ここでは2011年12月から「生きがい就労」が始まり、現在36名の高齢者が就労しています。

「身体の介護は資格を持ったケアスタッフが行き、生活援助は経験豊かな高齢の方に入っていただくというシステムによって入所者の生活の質が上がると思います」(社会福祉法人子羊会 長沼信治理事長)

仕事は大きく①調理・洗濯・掃除などのサポート、②施設内のティーサロンの運営サポート、③園芸の3つで、5～6名単位のグループに分かれ、通常2名分の仕事をグループで分担するワークシェアリング制を導入しています。

事業が始まって間もないこともあり、就労時間は一日2～



辻プロジェクトの「生きがい就労事業実施体制」図

上の図にあるように、民間事業者が決まった4つの事業では、既に高齢者の方が採用され、就労を開始しています。

辻プロジェクトではこの生きがい就労事業の立ち上げ・運営を通して得た知見やノウハウを蓄積し、モデル都市である柏においてだけではなく、他の地域にも実装できるように「社会技術」としてまとめていくことを目指しています。

3時間×週2日ほど、月収は「おこづかい程度」ですが、「働くことで生活がだらだらせず、グループの人に迷惑をかけないように、と気持ちに張りが出るのが良い」と好評です。

ワークシェアリングで問題になるのはシフト管理の複雑さです。そこでシフト管理については東京大学大学院情報理工学系研究科の研究者と連携し、JSTの研究成果展開事業(S-イノベ)の支援により、iPadを使ってグループメンバー同士で融通してシフトを決めるシステムを構築中です。



iPadのタッチパネルでスムーズにシフト入力操作

就労者は、就労希望日、また就労日以外で就労できる日などの予定を自分で入力。入力後に変更した場合はグループのメンバー全員にメールが届くようになっています。洗濯を担当されている池さん(62歳)が、実際にiPadを使ってシフトを入力している様子を見せてくださいました。

屋外では35坪ほどの敷地を菜園にして、園芸担当者が活動していました。土地を耕し、畝を立てるところから始め、きゅうり、ミニトマト、ナスなどを栽培しています。力仕事も多いため、男性が多く活躍。みなさん日焼けした顔で「毎日とても楽しく、充実している」と声を揃えます。この夏初めて収穫する野菜は、こひつじ園の食事に使われる予定です。



こひつじ園の園芸担当者の就労の様子。35坪の菜園できゅうり、ミニトマト、ナスなどを栽培。収穫した野菜はこひつじ園で使用する予定

★「まちの先生」として子どもと触れ合う

次に訪れたのは豊四季台団地の一角にある私立「くるみ幼稚園」です。基本保育時間終了後、延長保育を利用する子どもたちに、「まちの先生」として就労している小谷いく代さん（63歳）が絵本の読み聞かせを始めました。

保育園待機児童が多い柏市の事情を受け、この幼稚園は朝7時半から夜7時まで開園しています。基本保育は資格を持った幼稚園教諭が担当しますが、2011年12月から朝・夕の延長保育時、数名の「まちの先生」が保育補助として就労しています。

「この仕事を始めてから、幼稚園のそばを通るたびに、あの子は今何しているのかな、と考えたりするようになり、自分の生活が変わりました。モノクロの世界から色のついた動画の世界に入ったような楽しさを感じています」と生き生きとした表情で話す小谷さん。

「主人が亡くなり、子どもたちは独立して一人暮らしなので、早朝働くというのが私のライフスタイルに合っています」と話すのは早朝保育担当の木村利江さん（77歳）です。

「延長保育の時間は基本保育の時間とは違う雰囲気が必要



絵本の読み聞かせをする「まちの先生」小谷いく代さん（中央）と、木村利江さん（右）

だと思っています。基本保育の時間精一杯活動して疲れている子どもたちに、アットホームなくつろげる雰囲気を作りたいのです。高齢者の方たちの柔らかな対応はピッタリです」（学校法人くるみ学園・溜川良次理事長）。

くるみ幼稚園のほか、豊四季台地域にある「しこだ保育園」でも「まちの先生」のモデル就労が始まっています。

★民間学童保育で「実際に通用する英語」を教える

2011年3月、豊四季台団地のすぐそばに小・中学生を対象とし、学童保育と塾の要素を兼ね備えた次世代型学習塾「ネクスファ柏」がオープンしました。ここでは「英会話」ならぬ「英対話」講師として、現役時代の英語のスキルを活かし、3名の高齢者が就労しています。

江木隆之さん（下の写真右・64歳）は元商社マン。駐米経験12年、世界のほとんどの国を回ったという豊かな経験を活かし、中学生を対象に週1回、50分間の授業を2コマ教えています。「子どもたちに世界で通用する英語を教えた

い。英語はコミュニケーションのツールなので文法や発音の正しさにとらわれず、自己紹介をしたり、海外のマクドナルドに行ってハンバーガーが買えるようになってほしい。ハンバーガーって日本風に発音しても通用しませんから」。

また、「世界各国の人がそれぞれの国の訛りで話す英語を理解し、コミュニケーションが取れることが大切。英語を使うことは楽しいんだと伝えて中学に送りだしたい」と言う武藤達雄さん（下の写真左・71歳）は元石油会社勤務。リタイア後は、JICAのシルバーボランティアとしてマレーシアとペルーで約5年間活動されたそうです。

「実際に教えてみて、小学生と接することの難しさを痛感しています。集中力が切れた時どうするかなど、新米先生ですからヒヤヒヤしながらやっていますが、とても楽しいです」。

豊かな国際経験を経て柏に戻ってきた方たちが、自分のスキルを活かし、やりがいを感じながら働いている姿が印象的でした。



「ネクスファ柏」で小学生と「英語あそび」をする武藤達雄さん（左）「ネクスファ柏」系列の「サス塾」で中学生に英語を教える江木隆之さん（右）

★休耕地を活用した本格的農業

東京のベッドタウンである柏市は農業も盛んで、ねぎ・かぶ・ほうれん草などを主に生産しています。農家が高齢化し、跡取り不在のため耕作放棄地が多いこと、また農業に関心のある高齢者が多いことから、辻プロジェクトでは高齢者の就労の場としての農業について、自治体や民間事業者と検討を重ねてきました。

そして2012年1月、若手農家有志7名による有限責任事業組合(LLP)「柏農えん」が結成されました。「柏農えん」では、4月から高齢者の雇用を開始、現在はメンバーの農家で農作業経験を積んでいます。

「農業は人気がある反面、課題も多いのです」と語るのは、IOG 特任研究員の矢富直美さんです。「現在、職業農家の生産方式は工場のベルトコンベア的な流れ作業になっています。たとえば収穫後の作物の大きさ等の選別・出荷は、短期間にたくさんの人手が必要という点で高齢者の就労形態に合っていますが、単調で根気のいる作業です。ホワイトカラー層の多い柏市の高齢者は単純作業をあまり好みません。また就労前に抱えている農業＝牧歌的、というイメージとのギャップが大きいことも敬遠される理由の一つです」。

この課題に対しては、多品種少量生産を行い、地産地消の

★高齢者の就労は「生きがいを得る」こと

IOGは、生きがい就労事業が就労者の心身に及ぼす効果についても調査・検証しています。

まず就労前のセミナー参加者に就労開始前の検査を行いました。全ての項目を検査終了した71名(平均年齢69.8歳)を解析したところ、「体力や記憶力は正常な状態だが、家に閉じこもりがちで、うつ傾向の割合が高い」人が40%以上いることがわかりました。



東京大学高齢社会総合機構・柴崎孝二氏

その後、就労が決まった方に日記をつけてもらい、就労前後の行動や生活の変化を調べました。すると就労は週1～2日であるにもかかわらず、勤務日以外でも外出の機会が増え、行動が活発になるという変化が見られました。

「活動量計のデータでも、勤務日はもちろん、勤務していない日も歩数、消費カロリーなどが明らかに増加し、活動量が増えていることに注目しています。血管の機能や記憶力なども改善しています。高齢者にとって就労はただ単に『お金を得る』ということではなく、『生きがいを得る』ことであり、健康寿命の促進につながります」(IOG 健康チェックセンター担当 特任研究員柴崎孝二氏)。



ねぎの収穫作業(写真上)と、選別作業(写真右)。LLP「柏農えん」の職業農家の方の指導を受けて作業を進める



直売所に卸すことで家庭菜園の生産方法に近づけるといいうり方による解決を目指しています。

さまざまな課題の解決方法をモデル事業の中で実践しつつ、2012年秋からは、休耕地を活用した高齢者中心の農業を実現していく予定です。

今後、就労半年後・一年後の追跡調査や、より多くの高齢就労者のデータを蓄積し、就労が高齢者の心身にどのような影響を及ぼすか、また生きがいがどのように改善して行くかを検証していく予定です。

辻プロジェクトでは、ここでご紹介した事業のほか、今後数期に分けて建て替えが行われる豊四季台団地を中心に高齢者の就労事業を拡大していく予定で、今後ますますの充実が期待されます。



(右) 商業地区の空き店舗を利用して社会福祉協議会が開いている「にここサロン」。団地住民の憩いの場となっている



(上) 次期建て替え予定の豊四季台団地商業地区。昔ながらの商店街で風情を感じさせるが、閉店した店も多い